目次

竹取物語解説……10
伊勢物語解説……19

竹取物語

一　かぐや姫のおいたち……3
〈今は昔竹取の翁といふ者ありけり〉……3
〈竹取の翁、竹を取るに〉……9
〈翁、竹を取ること久しくなりぬ〉……15
二　つまどひ梗概……19
三　石作の皇子と仏の御石の鉢梗概……19
四　車持の皇子と蓬莱の玉の枝梗概……20
五　阿部の右大臣と火鼠の皮衣梗概……21
六　大伴大納言の龍の頸の玉……23
〈おのおの仰せうけたまはりてまかりぬ〉……23
〈かぐや姫据ゑむには例のやうには見にくし〉……29
〈遣はしし人は夜昼待ちたまふに〉……33
〈いかがしけむ速き風吹きて〉……39
〈大納言これを聞きてのたまはく〉……43
〈三、四日吹きて吹き返し寄せたり〉……49
〈国に仰せたまひて手輿作らせたまひて〉……53
〈これを聞きて離れたまひしえの上は〉……59
七　燕の子安貝……63
〈中納言石上のまろたりの家に〉……63
〈燕の人のあまた上りゐたるにおちて〉……71
〈中納言くらつまろにのたまはく〉……77
〈日暮れぬればかの寮におはして見たまふに〉……81
八　御門の求婚梗概……88
九　かぐや姫の昇天……89
〈八月十五日ばかりの月出でゐて〉……89
〈かかるほどに宵うち過ぎて〉……97
〈立てる人どもは装束のきよらなること〉……101
〈竹取心惑ひて泣き伏せたる所に〉……107

〈天人の中に、持たせたる箱あり〉……113
〈その後、翁、嫗、血の涙を流して惑へど〉……123
〈中将人々を引き具して帰り参りて〉……125

伊勢物語

一　うひかうぶり（第一段）
昔、男、初冠して……133
二　西の対（第四段）
昔、東の五条に、大后宮おはしましける……139
三　芥川（第六段）
（一）昔、男ありけり。女のえ得まじかり……145
（二）これは二条の后の……149
四　東下り（第九段）
（一）昔、男ありけり。その男……157
（二）ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ……163
（三）なほゆきゆきて、武蔵の国と……169
五　筒井筒（第二十三段）
（一）昔、ゐなかわたらひしける人の……177
（二）さて、年ごろふるほどに、女……183
（三）まれまれかの高安に来て見れば……189
六　梓弓（第二十四段）
昔、男、片田舎に住みけり……195
七　紫（第四十一段）
昔、女はらから二人ありけり……201
八　行く螢（第四十五段）
昔、男ありけり。人の娘のかしづく……207
九　花橘（第六十段）
昔、男ありけり。宮仕へいそがしく……213
十　渚の院（第八十二段）
（一）昔、惟喬の親王と申す……219
（二）御供なる人、酒を持たせて……225
十一　小野（第八十三段）
（一）昔、水無瀬に通ひたまひし……233
（二）かくしつつまうで仕うまつりけるを……237
十二　さらぬ別れ（第八十四段）
昔、男ありけり。身は卑しながら……243

十三　鶉（第百二十三段）
昔、男ありけり。草深に住みける女を……249
十四　つひにゆく道（第百二十五段）
昔、男わづらひて、心地死ぬべく……253

付　録

竹取物語・伊勢物語に関する大学入試問題……255
竹取物語の歌索引……282
伊勢物語の歌索引……282

参　考

小さ子物語について……14
昔物語と貴種流離譚……22
龍と雷と……48
洒落について……62
しでのたをさとほととぎす……70
天人と天上界……112
不死の薬……121
羽衣説話……121
伊勢物語と古今集……144
伊勢物語と源氏物語……212
伊勢物語と大和物語……218
在原業平と惟喬親王……224

古典の学習室

学習の心構え……14
古典の常識……28
助動詞(1)（き・けり）……32
助動詞(2)（つ・ぬ）……52

助動詞(3)（たり・り）……58
助動詞(4)（なり・めり）……69
助動詞(5)（む・むず・じ）……100
助動詞(6)（べし）……106
助動詞(7)（らし・まし）……111
助動詞(8)（らむ・けむ）……122
ク語法について……138
敬語……148
係結びのきまり……156
和歌の修辞法(1)……162
助詞（だに・すら・さへ）……168
和歌の修辞法(2)……176
過去の助動詞「き」の
カ変・サ変への接続の仕方……194
平安物語文学の流れ……206
貴族の一生の行事……217

(6) 「いとうつくしうてゐたり」を品詞分解し、説明せよ。

(7) 「見れば」と「幼ければ」とは「已然形」＋「ば」の形であるが、それぞれその違いを説明せよ。

(8) 「幼けれ」の「けれ」は、「ありけり」の「けり」とどう違うか、説明せよ。

(9) 竹取の翁がかぐや姫に「おはする」「たまふ」の尊敬語を用いている理由を説明せよ。

いと（副詞）＋うつくしう（形容詞シク活用「うつくし」の連用形「うつくしく」のウ音便）＋て（接続助詞）＋ゐ（上一段動詞「ゐる」の連用形）＋たり（完了の助動詞「たり」の終止形。ここは存在の意で、テイル）

「已然形＋ば」の形は順接の確定条件を示すのであるが、さらに次の三つの意味の違いがある。(イ)上の文が、下の文の理由・原因になる意を示す。（原因・理由条件・ノデ・カラ）　(ロ)上に述べた条件のもとで、たまたま、あるいは同時に下の文の結果があることを示す。（偶然条件・同時条件・シテミルト・タトコロガ、同時ニ・ト）　(ハ)上の条件のもとでは、いつも下述の事柄があることを示す。（恒常条件・ト・トイツモ・キット）「見れば」は(ロ)の場合で見ルトの意。「幼ければ」は(イ)の場合で小サイノデ（カラ）の意。

「幼けれ」の「けれ」は形容詞ク活用「幼し」の已然形の活用語尾。「ありけり」の「けり」は過去の助動詞「けり」の終止形。過去の助動詞「けり」の已然形も「けれ」なので形容詞の已然形と混同しやすい。注意しよう。

かぐや姫が三寸ぐらいで竹の中に坐っていて、しかもその竹が光っているという不思議な現象の中で誕生したというように人間離れした存在であったため畏敬の念をもって尊敬語を用いたのである。したがってここは竹取の翁のかぐや姫に対する敬意ということになる。古文の敬語はこのように畏敬の念をもった場合にも用いられることがあるから覚えておこう。また尊敬の補助動詞は古文の中で最も多く用いられる敬語であるからよく覚えておくとよい。補助動詞の場合は「動詞＋たまふ」の形であらわれるからわかりやすいはずである。

〈竹取の翁、竹を取るに――翁が裕福になり姫は成長する〉

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだてて、よごとに、黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。かくて、翁やうやう豊になりゆく。

この児、養ふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪上げなどさうして髪上げさせ裳着す。帳の内よりも出ださず、いつき養ふ。この児のかたちのけうらなること世になく、屋の内は暗き所なく光り満ちたり。翁、心地悪しく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。

〔通　釈〕竹取の翁が、竹を取るときに、この子を見つけてから後に竹を取ると、竹の節を区切りとして、節と節との間の空洞一つ一つに、黄金のはいっている竹を見つけることがたび重った。こうして、翁はしだいに裕福になってゆく。

この幼児は育てているうちにすくすくと大きく成長してゆく。三か月ぐらいになるころに（背たけが）一人前の大きさの人になったので、髪上げの祝いなどをあれこれと手配して、髪をあげさせ、裳を着せる。几帳の中から外へも出さず、大切に育てる。この児の顔かたちの目立って美しいことは世間に比べものがなく、建物の中は（その美しさで）暗い所もなく、すみまで光が満ちている。翁は気分が悪く苦しいときも、この児を見ると、苦しいこともなくなってしまう。腹立たしいこともまぎれてしまうのである。

〔大　意〕竹取の翁は、姫を見つけてからは、黄金ある竹を見つけることが重なった。こうして、だんだんと豊になっていった。姫はすくすくと大きくなり、三月ほどして立派な一人前の女性となったので、成人の式をあげ、大切に育てた。清らかで美しい姿は世間に類がなく、家の中は暗い所もなく、光が満ちている。また翁の心も慰められた。

〔品詞分解〕竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に、竹を取るに、節をへだてて、よごとに、黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。かくて、翁やうやう豊になり

（翁：名　竹：名　を：格助　取る：ラ四・体　に：格助　この：代名　子：名　を：格助　見つけ：カ下二・用　て：接助　後：名　に：格助　竹：名　を：格助　取る：ラ四・体　に：接助　節：名　を：格助　へだて：ダ下二・用　て：接助　よごと：名　に：格助　黄金：名　ある：ラ変・体　竹：名　を：格助　見つくる：カ下二・体　こと：名　かさなり：ラ四・用　ぬ：完・終　。　かくて：副　翁：名　やうやう：副　豊に：形動ナリ・用　なり：ラ四・用）